

日本一の「農の学び舎」を目指して

首都圏に近い地の利を生かし、農産物の少量多品目生産と加工品開発を実践している群馬県甘楽富岡地域。その技術と経験を生かし、青年海外協力隊候補生の技術補完研修や開発途上国のJICA研修員の受け入れに協力している。こうした国際協力を通して人々が刺激され、地域活性化の糧となり、地元農業の明るい未来に向けた新風が巻き起こっている。



野菜隊員候補生の古田さん(右)に農業指導している野口純一さん(中央)、宣之さん(右から2人目)。「分からないことがあるはずすぐに質問に来るし、教えがいがある」と古田さんを温かく見守っている

甘楽富岡の経験を途上国へ

見渡すかぎり山々に囲まれ、昔ながらの農村の雰囲気を醸し出す群馬県甘楽富岡地域は、古くから養蚕・コンニャクの産地として栄えてきた。1980年代、急速な輸入自由化の影響で農産物の価格が急落し大打撃を受けたが、94年の広域合併を機に、首都圏への農畜産物供給地帯を目指す再生プログラムを開始。生産組織の統合を行い、農業協同組合(JA)を中心に地域全体の協働による農業に取り組み、活気を取り戻した。食料自給率40%を割り込む日本の現実を受け止め、食農教育にも力を入れている。そんな甘楽富岡地域の人々が、2003年から新たに取り組んでいるのが、JICA青年海外協力隊候補生の技術補完研修^{※1}や途上国研修員の受け入れ事業だ。

技術補完研修では、毎年6カ月間、



5、6人の野菜隊員候補生が、一人一軒の農家から直接、技術を学ぶとともに、畑の一部を借りて、途上国の環境を想定した、比較的やせた土地でも育てやすいサツマイモや落花生、豆類などを無農薬で栽培している。JA支所を改装した合宿所で共同生活しながらそれぞれの農家に通

※1 相手国からの要請に的確に応えられるよう、技術・技能を補完するための制度。合格者の技術レベルや経験を勘案の上、内容・期間などを決定し、研修期間は数日~6カ月。

甘楽富岡地域を代表する農産物、下仁田ネギ(上)とコンニャクの畑(下)。隊員候補生や途上国の研修員は、農産物の少量多品目生産と加工品開発を実践している地域の農家から多くの技術や経験を学んでいる



6カ月の技術補完研修を終えた隊員候補生に修了証書を手渡し、握手する矢島さん(右)。候補生も「自然塾寺子屋や農家の方から学んだことを途上国で生かせるよう、精いっぱい頑張ります」と注意を述べる

っている。また、村落開発普及員候補生の研修も年に数回、約3週間の日程で行われる。JAや農家の人、行政などの協力を得て、地域農業の発展経緯やJAの組織運営に関する講義のほか、果樹栽培や畜産、農産物加工、野菜流通、育種などを体験型で学び、地域開発に必要な基本知識を伝えている。

今夏、パラグアイに派遣される予定の野菜隊員候補生、古田剛也さんは、昨年10月から、ナスやニラ、ピーマンなどを生産する野口純一さん、宣之さん親子の指導を受けている。合宿所から毎朝、自転車で野口さん宅に通い、午前中は農作業や出荷の手伝い、午後は野口さんの畑を借りて途上国で育てやすい野菜を自由に

試験栽培中だ。「大学で農業を学ぶ机上の知識はあったが、実践した経験はほとんどない。ここでは、途上国で役立つための引き出しをたくさんもっている」とさわやかな笑顔を見せる古田さん。そんな彼を温かく見守る純一さんは、「協力隊なんて聞いたこともない」と、当初は、よそ者を受け入れることに抵抗を感じていた。だが、宣之さんらの説得を受け、いざ迎えてみると「今時こんなか」と驚き好感を覚えた。そして「私たち農家の考えはつい内へ内へと向きがちだが、途上国のためにと熱心な彼らを通して広い世界を意識するようになった」と言う。

地域活性化につながる隊員候補生の情熱

JAG甘楽富岡青年組織協議会^{※2}会長の白石義行さんは、候補生を同地域に迎え入れることを決めた最初の協力者だ。

きっかけは、元青年海外協力隊の矢島亮一さんとの出会い。99年から2年間、中米・パナマの村おこしに携わったが、任期を終えて帰国後、日本の子どもたちの自殺や非行が増えていることを知った矢島さんは、「共存・共生の思想を次世代に引き継がなければ」と、元パナマ隊員の新井圭介さんとともに、地元群馬県の

子どもを対象にした自然体験型合宿や在住外国人との交流会などを企画。03年に(特活)自然塾寺子屋を設立し、途上国と群馬県の農村を結ぶ活動を始めた。そのフィールドを求めて県内各地を駆け回っていたときに出会った、甘楽富岡地域にある寺の副住職が、白石さんを紹介してくれた。同時に、JICA筑波からJICAが技術補完研修の受け入れ先を探していると聞いた矢島さん。農業を後世に残そうと奮闘中の白石さんに「さまざまな農産物を生産し、それらに合わせた加工品開発が盛んな甘楽富岡地域は、途上国の農村で活動する隊員にとって有効なシミュレーションができる格好の場。ぜひ協力してほしい」と強く依頼。白石さんも「自分たちの力が役立つなら」と応じ、農家に協力を求めた。

「正直、言い出しっぱの自分としては暗中模索。不安もあった」と振り返る白石さん。農家からは「そんな夢みたいなこと」「面倒くさい」と反対意見も多かった。受け入れてからも、畝も満足に使えない候補生を見て「途上国に行けばトラクターや耕す機械はないだろうに、こんなので大丈夫か」と心配を募らせ、まずは畑づくりや野菜の種まきなど基礎的なことから指導を始めた。

だが、農業が大好きでやる気と情熱を持った候補生たちは、農家の



白石さん(中央)のもとで研修を受け、現在ニジュールとソロモ諸島で野菜隊員として活動する馬庭真由子さん(左)と大川原亜耶さん(右)



※2 JAG甘楽富岡管内の青年部、青壮年部11支部が連絡協議会を組織。地域のイベントに参加したり、小学生の稲作体験事業など町おこしにも力を入れている。



2007年11月、社会開発・農村開発に携わる中米カリブ地域の行政官が、JICAの研修の一環で甘楽富岡地域に滞在。農家の人々と直接話し、生産者との積極的なコミュニケーションの大切さを学んだほか、ネギの植え方なども体験した

人々のアドバイスを真摯に受け止めながら、徐々に地域の中に溶け込んでいった。合宿所や畑の周辺には、彼らに会おうと散歩をする人が増え、農家や合宿所に差し入れる人も多いう。

白石さんは「農業に携わる人材が減る中で、農業に夢を持って頑張る若者たちの存在は刺激的で、地域の活性化にもつながる。やがて帰国した隊員が、私たちの地域農業に伝えてくれるものもあるだろう」と期待を寄せる。また、06年12月に東京で開催された、関東甲信越地区のJA青年組織協議会幹部研修会の発表大会で、JA甘楽富岡の青年部代表として出席した白石さんは、候補生を受け入れ、地域の活性化に貢献した

事例として、甘楽富岡地域の取り組みを報告した。

矢鳥さんも「隊員が途上国の現場に行ってもすぐに何かできるわけではないかもしれないが、人々と話をし、まずは信頼してもらおうことが大切」と、自らの経験を踏まえて候補生にアドバイスする。また、週に何度も農家や候補生を訪れて一人一人の意見を聞き、研修をより良いものにしてようと試行錯誤を続けている。

日本の農業を支える精神とは

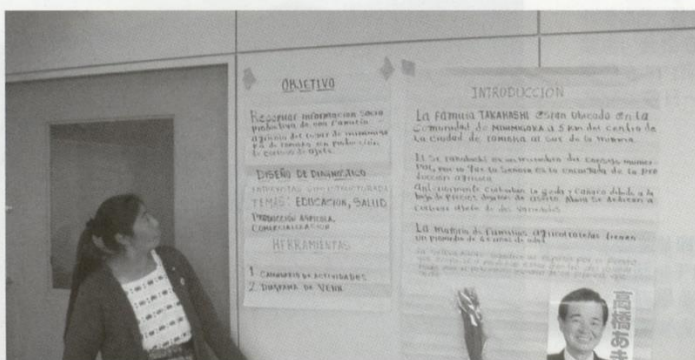
高橋章・薫さん夫妻は、毎年4、5回、JICA研修員のファームステイを受け入れている数少ない農家の一つだ。研修では、地域農業振興や環境保全型の開発を担う中南米やアフリカの行政官らが、農業体験や流通・販売などに関する調査を通じて甘楽富岡地域の取り組みを学ぶ。

研修を担当するJICA筑波の藤城一雄さんは、「各地域に適した開発の方法を自ら考えなければならぬ途上国の研修員にとって、地域の人々の生の声や生活に触れるファームステイプログラムは重要」と言う。一方、受け入れ農家は農業指導だけでなく、生活習慣の違いや食事などにも気を配るため、薫さんは「きつちりとしたおもてなしを心掛ける

農家の女性にはちよっと大変かも」とこぼす。だが、良い面もある。「私のように農家に嫁いだ女性は毎日休むことなく一生懸命に生きてきた。そういう日本人の勤勉さを途上国の人にも分かってもらいたい」とこれからも研修に協力する意欲を見せる。その思いは研修員にも届いているようだ。昨年11月、高橋家に滞在したグアテマラの研修員は、「日本の女性から『一生懸命』の素晴らしさを学んだ」と報告会で熱く語った。

藤城さんは「より良い研修を行うには地域の人々との信頼関係づくりが不可欠だが、それを時間をかけてつくり上げてきた自然塾寺子屋はJICAの貴重なパートナー」と頼りにしている。

「すべては人とのつながりに支えられている」と話す矢鳥さん。途上国や次世代のためにはと思って始めた活動が、地域の人々の誇り呼び起こすことにもつながっている。白石さんら農家の人々も「技術も重要だが、一つ一つの農作業に取り組む心を大切にすることを伝えたい」と張り切っている。やがてこの地域が「甘楽富岡農村大学校」と呼ばれるような日本一の「農の学び舎」となって、地域農業を活性化させようという大きな夢を描いている。



先住民族の女性の自立支援を行うグアテマラの研修員は、高橋さん宅に滞在し、野菜栽培や商品開発の方法などを学び、「日本の農村女性の勤勉さが、地域の発展を支えている」と報告会で発表した